

宮城学院女子大学英文学科"Peer Assisted Learning" (P.A.L)・プログラム
高レベルの教育学的サポートを必要とする英文学科1年生対象のプログラムの設置と実施

英文学科 : Barbara Bourke、福地和則、Chris Huston、木口寛久、増富和浩、鈴木雅之、山口早苗
(学習支援者)、吉村典子、遊佐典昭、John Wiltshier

1. 背景と目的

大学生の「学力低下」や「大学全入時代」を背景に、従来のレベルにはない学力の学生を高等教育機関で指導することが責務の一つとなった。大学で「リメディアル教育」が求められているように、「再教育」もしくは授業外での「補習」が今や必須の状況である。

本学英文学科学生における英語基礎学力においても同様の傾向が見られ、全体的な学力向上および従来の教育運営では対応できない下位レ

年度	受験者数	第1回		再試	
		合格	不合格	合格	不合格
2009 PAL 実施前	75	38	37	13	24
2010 PAL 実施後	117	102	15	11	4

ベルの学生への特別な配慮や指導が、重要かつ緊急の課題となった。

こうした状況に対応するため、また、学生が上学年に進級後、より専門的な研究課題に対応できる基礎力を養うためにも、初年度教育はより重要な役割を果たすものと位置づけられる。そこで本学科では、1年生を対象とし、2008年度から具体的な方策を立て、いくつかの実践を試みた。以下にその詳細を記すが、2008・2009年度の実施から見えてきた課題を踏まえ、本年度2010年度より、特に、学習支援のシステムに考慮したプログラムを設置することとした。それが本研究をと

おして実施した"Peer Assisted Learning(PAL)"プログラムである。

2. 実施内容

1 : PAL 実施までの経過 (2008-2009年度)

PAL 実施内容に入る前に、まず過年度までの経過を以下に簡単に付し、あわせて PAL 実施後の比較考察資料としたい。

2008年度より、英語共通基礎教材『Re-Start』を選定し、全学年の学生、英文学科専任教員および非常勤講師全員に配付し、授業で参照資料として導入することを呼びかけ、様々な場面での繰り返し使用によって学生の基礎力定着をねらった。

共通教材を通して、学生には、基礎英語を確実なものにするよう自主学習を促し、一部の英語基礎科目では実際に参照資料として導入された。

ここでいう「基礎英語」とは、基本的な文法理解に焦点をおいたもので、これは、昨今、学力の低下が顕著な領域であり、「リメディアル教育」においても重点が置かれている領域ある。従って、共通教材も「中学校卒業～高校1年程度の英語力をもつ学習者を、文法中心に、単語・熟語、リスニング、ライティングにおいて、中級レベルまで効率よく引き上げる(『Re-Start』はしがき)」ことを目的としたものを選定した。

こうした学習をする学生の目標、および、実力を測る目安として、共通教材から試験範囲を設定し、前期に Basic Achievement Test(以下 BAT と記す)を1年生対象に実施することにした。

BAT は、本研究員が作成し、①語彙②品詞③書き換え④並べ替え⑤文型⑥関係詞を用いた書き換え、を通して基礎文法能力の確認を行う内容である。採点は学科専任教員全員が関わることにより、学生の現状を把握する方途の一つとした。採点后、平均点を参考にして、合格点を設け、不合格者には、後期末に再試験を実施し、合格にむけて学習を重ねることにより、基礎英語能力を身につけることを目的とした。また再試不合格者には、書き取りを中心とした課題の提出をもって修了とした。過去2年間の結果は<表>のとおりである。

こうした方式により、繰り返し学習と基礎能力の確認するきっかけにはなったが、<表>の2009年度の試験結果からも明確なように、再試験においては受験者の半数以上が不合格のままである。つまり、学習効果、もしくは学習習慣が充分でないことを意味する。また、不合格者の回

<表>：2009年度2010年度B.A.T.の結果

答状況をみると、基礎英語の理解が曖昧なことも確認された。従って、下位レベルの学生には、継続的な学習習慣および理解度の自覚、基礎力をもつことに主体的に取り組むことを促すばかりでなく、具体的に支援をするシステムが必要であると判断された。

2：PALの設置（2010年度）

以上のような状況を踏まえ、高レベルの教育的支援システムとして設置したのが、“Peer Assisted Learning”プログラム(以下PALと記す)である。PALプログラムは、学習指導において、教員が直接それにあたるのではなく、

“Peer(仲間)”が支援にあたり、上位レベルの学生が下位レベルの学生の支援を担当し、基礎学力を身につけ、高等教育レベルに結びつけて

いくことを目的としたものである。一般的には、同学年の上位レベルの学生が下位レベルの学生を、あるいは上級生が下級生の学習支援を行うものであるが、本学科においては、卒業生(本学修士課程修了者)が支援にあたった。これにより、学年を超えた交流やつながりが形成されるとともに、年齢や立場が近いことにより、質問や相談がしやすい環境ができる。また、支援にあたり、同じ大学の学生経験から、大学生活の状況を把握した上でのより身近な指導が可能である。そして、学習支援者にとっても、学習指導の実践の場として多くの経験を積むことが可能となる。この学習支援者が、教員(本研究員)と、指導法、教材などを相談して決め、現場での状況を教員に報告しながら運営し、学生、学習支援者、教員が連携をとるかたちで実施された。

本年度、このプログラムを用いて実施したものは、大きく次の3つである。

- (1)BAT実施前に、1年生全員に呼びかけて開いた「試験対策講座」(試験範囲を中心にした勉強会)
- (2)BAT実施後に、不合格者と対象とした勉強会
- (3)2年生の下位レベルの学生を対象とした勉強会

このうち、本研究で課題とした「高レベルの教育的サポートを必要とする英文学科1年生対象のプログラムの設置と実施」においては、(2)がその具体にあたる。よって(2)を中心に、以下でその実施状況の詳細をあげることにしたい。

3：PALの実施（1年生下位レベルの学生を対象とした学習支援）

本年度も例年どおり6月にBATを実施した。結果は<表>下段に示した通りで、合格者の割合は、今年87%、過年度49%というように、4

0%近く増加している。これは、前掲(1)の「対策講座」および、英語基礎科目で共通の教材を導入した授業が増加したことにもよるであろう。依然、不合格者がいるにしても、その数の減少により、不合格者を対象とした下位レベルの学生に対する学習支援が、より少人数できめ細かに実施できることとなり、対象グループの規模としては理想的なかたちとなった。

このようにして6月BAT不合格者15名を、さらに2グループに分け(7人と8人グループ)PALプログラムを開始した。

プログラムは大きく2段階に分け、7月より実施した。まず第1段階として、BAT実施後、時をおかずして、7月に各自の誤った解答を確認させながら、試験解説を中心に行った。次に、夏休みをはさんで、後期に第2段階として以下のとおり文法事項別に勉強会を実施した。

後期1：品詞、文型

後期2：否定文、疑問文、時制

後期3：受動態、疑問詞を用いる疑問文

後期4：関係代名詞

後期5：BAT過去問題

後期6：BAT過去問題

後期7：BAT過去問題

後期8：BAT模擬試験

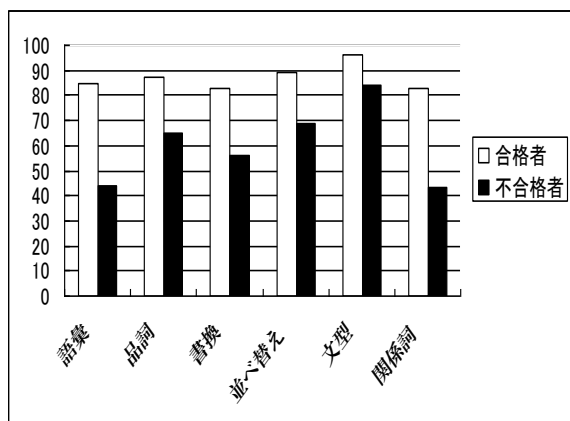
後期9：個別指導

実施日時については、1年生の空き時間に設定し、時間割内に行うことにより参加しやすくした。週1時間(80分)、毎週、約2ヶ月間(10月末から12月上旬)に設定し、その後、再試験を実施した。

再試の結果は<表>にあるように、15人中、11人合格、4人不合格であった。15人には、一人ずつ個別に答案用紙返却時間を数分とり、間違いを今一度確認させながら、学習支援者より、回答状況に関するコメントや今後の取り組みについて等の声掛けをした。また、不合格者には、長めに時間をとり、解説を加え、間違えた部分に関して理解したことを確認したうえで返却し、追加課題(単語と英文の書き取り)を出した。不合格者のうち、勉強会の出席率と再試点数が著しく低かった1名の学生に関しては、返却時に解説を加えたうえで、数週間後にもう一度受験させ、その場で採点し、間違えた部分を確認した上で、追加課題を出した。その提出をもって、2010年度のPALは終了した。

3. 結果および考察

1：BATの結果から



<グラフ>::B.A.T.合格者・不合格者の正解率(項目ごと)

次の<グラフ>は、本年度 BAT の項目ごとの合格者と不合格者の正解率の比較を示したものである。合格者は、項目ごとの正解率に大差はないが、不合格者は、項目によってさらに差があり、特に、「語彙」と「関係詞」は50%を下回っている。「関係詞」においては、PAL でより丁寧に解説し、練習問題を重ねた。「語彙」について、BAT で出した内容は、日本語に該当する英単語を、提示した1文字のアルファベットに続けて書く問題である。共通教材から出題の範囲も設定していることから、繰り返し練習の不足、つまり、習慣的かつ主体的に取り組むことが定着していないということがうかがえる。下位レベルの学生への教育、ひろくは、「学力低下」に対する「リメディアル教育」については、学力面が重視されがちであるが、学習に対する意識および習慣づけ、そのための道筋をつくることがまず求められるであろう。以上のような点から、PAL においても継続性が考慮されるべきで、本年もその点を意識して、実施日程を組んだ。

2 : PAL の定期的実施から

PAL は②の3の項で示したような日程で、後期は定期的(週1)に継続的(10週)に実施するこ

ととした。全体の出席率は70%で、大半の学生がほぼ定期的、継続的に参加した。

そして、この勉強会終了の翌週に、「再試験」を設定したことにより、基礎学力を身につけるといのが大目標であるなかに、学生にとっては「BAT 合格」が明確な目標となり、学習の具体的な動機付けとなった。因みに、②の2-(2)項にあげた2年生の下位レベルの学生を対象とした勉強会でもやはり基礎力をつける目的で実施し、丁寧な学習支援が進められたが、一連の勉強会のあとに、例えば「試験」というような具体的で短期的な目標を定めなかったこともあり、後半にいくにつれ出席率も著しく減り、最後は1割弱の参加者数となった。このことから、学生にみえやすいより具体的な動機付けが必要であることが確認できる。

3 : 少人数グループにおける PAL

学習支援者からの報告によれば、1年生の勉強会では、分からないことを自ら解決しようとする姿勢もみられ、質問も飛び交うことが頻繁であったということである。これは、学習支援者の支援能力に加え、比較的年齢の近い「先輩」であることが、質問しやすい、相談しやすいことにつながった点あげられる。勉強会後も、大学生活のこと等を話題にしたりすることも多々あり、「先輩・後輩」のコミュニケーションも取れていたようである。

また1グループ7~8人という少人数での実施も、質問しやすい環境となり、同時に、近似レベル、参加にいたった背景や目標を同じもの共有していることが、グループとしての連帯感につながり、学習支援者から「グループ全体で勉強に取り組む姿勢ができた」との報告もなされた。

最終9回目の勉強会(BAT 再試1週間前)は、予備日として、参加は任意としたが、半数以上が集

まってきたことと、事前に取り組みたい内容も提案されるなど、意欲的な学生が目立ってきた。こうしたことから、主体的に「勉強に取り組む姿勢」が形成されていることが確認できる。

4：BAT 再試験における PAL

〈表〉の数値からもわかるように、再試験における合格者の割合は、PAL を実施した本年度は 73% となり、実施前の 2009 年の 41% と比較すれば、飛躍的に上昇したと言える。数値の内情をみると、本年度の不合格者 4 名の大半は、勉強会の出席率が著しく低い学生であった。換言すれば、PAL 参加者の殆どが合格にいたっている。このことから PAL の参加が、大きな効果をあげたことがわかる。また、こうした数値的に明らかな成果に加え、PAL をとおして勉強会を具体的に実施したことにより、苦手な問題を自分で把握するきっかけとなり、学習支援により、苦手あるいは不明瞭な部分が整理され、学生には苦手意識の克服、勉強の継続性、主体的に取り組む姿勢が形成された。これらの点は、PAL の大きな成果といえよう。

しかし、BAT 再試験合格が、短期的目標であり、その再試および不合格者の課題提出をもって、PAL による勉強会は終了したことから、その後の、自主的学習の継続をどのように維持するかについては今後検討されるべき点である。

尚、本年度 BAT 再試不合格者 4 名に対しては、勉強の習慣づけを意図して、試験範囲の主要例文等の書き取りを課題としたが、再試答案用紙返却の際に、個別に解説、状況によってはもう一度試験形式で実力を確認するなどして、個別指導による勉強の機会をつくり、忍耐強くコミュニケーションを取りながら、丁寧な学習支援を行った。

5：研究会の実施を通して（課題と展望）

2011 年 2 月に PAL の総括と研究会を兼ねて、本研究員全員と学習支援者が集まり意見交換を行った。

学習支援者から、1 年間を通しての、実施内容が報告され、現場での状況を全員で共有した。

研究会では、本研究員で、本学非常勤講師英語基礎科目 Grammar 担当者より、本学英語基礎科目を約 10 年担当する中での変化と現状、および、高等学校指導要領の変化との関係で大学教育を検討する報告がなされた。

まず、昨今叫ばれている「英語ができない」とはどういうことかを分析するなかで、運用技能のうち「話す」「聞く」より、「読めない」「書けない」「文法がわからない」点に問題が見受けられることが指摘され、学生の授業時の状況からは、「辞書を使えない（品詞がわからない等）」、「英文を正確に読めない」、「正しい英文を書くことができない」、「うろ覚えの文法知識」、「不確かなことを調べることができない」などの現状があげられた。

これは、報告者が高校と大学教育の両方に従事するなかで、高校教育では、指導要領の変化により、「コミュニケーション」英語の名の下に、英文法の指導などが、科目を横断する形で、またそれにより不明瞭なかたちで導入されているため、体系的な指導が不十分なまま大学へと送り出されていることがあるとの指摘であった。こうした現状を踏まれば、大学進学した学生を単純に「学力低下」と位置づけることはできない。今一度、高校までの教育内容を把握したうえで、大学教育レベルに効果的に結びつけていく、方策が必要であろう。

また、上述のような現状もあり、本年度の PAL は英文法の整理と理解をとおして、英語基礎力を持たせるところに焦点をおいたが、総合的英語基

礎力を考えた場合、他の英語運用能力をどのように連動させ、相乗的に高めていくかが問題である。さらに、本年度は、下位レベルの学生への対策が中心となったが、中・上位レベルの学生のさらなる引き上げ、学習支援に卒業生だけではなく、上位レベルの在学学生を活かしたPALプログラムを検討する必要もあるであろう。

本年度PALプログラムは、下位レベルの学生を対象にし、それにおいて多くの成果を得ることができたが、上述の点を踏まえ、英語教育における総合的改善のためには、PALを単なる補習的な位置づけとして行うのではなく、さらに精緻で総合的なプログラムとして改良をはかり、カリキュラム内の英語基礎科目と連動するようなしくみをもたせることが必要であろう。そのため、次年度にむけては、英語基礎科目の整備、科目間、教員間の情報と目的の共有など、有機的にむすびついたシステムの構築をめざすことが課題である。それを検討・実施するプロジェクトを発足されることで、研究員一同一致し、本年度教育推進事業の総括とした。

<参考文献>

- 1) 清田洋一「否定的な学習意識を協働学習で変える：自尊感情の向上を目指して」『英語教育』大修館、Feb. 2001, Vol. 59, No12.
- 2) 諸星裕『消える大学 残る大学：全入時代の生き残り戦略』集英社、2008.
- 3) 酒井志延「リメディアルと向き合う」『英語教育』大修館、Feb. 2001, Vol. 59, No12.
- 4) 鈴木久美「苦手意識を持った学習者を救うことの意味」『英語教育』大修館、Feb. 2001, Vol. 59, No12.

5) 田原博幸「自動繰り返し学習機能付き eラーニングの有効性」『英語教育』大修館、Feb. 2001, Vol. 59, No12.

6) 高山英士, *All IN ONE : Re Start*, Linkage Club, 2007 年

7) 吉田新一郎「学ぶを知り、教えるに生かす」『英語教育』大修館、Feb. 2001, Vol. 59, No12.